

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：30115
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2010～2014
 課題番号：22402046
 研究課題名(和文) 高齢者と地域を結び付ける新しい試みの国際比較 福祉と一体化した縁側サービス

 研究課題名(英文) Cross-national research about the possibility of the new services which involves the elderly with the community; EN-GAWA service that is integrated with public welfare services

 研究代表者
 隼田 尚彦 (Hayata, Naohiko)

 北海道情報大学・情報メディア学部・教授

 研究者番号：40301014

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、シカゴにあるMather's More Than a Cafe、釧路の地域食堂、サンパウロ日伯援護協会のデイサービス、台南市にある長榮社區と台南市YMCAに代表される計5カ国10カ所以上の縁側サービスを対象とした。これらの場所では、食事等に加え、様々な文化教室やイベントが行われている。本研究では、200名を超える参加高齢者や運営者・スタッフなどに対して、彼らのQOLや活動内容などについてインタビューした。調査の一部には、PGCモラル尺度を用いた。調査を通じて、参加高齢者の参加前後の心境や行動の変化などを確認し、これらの取り組みの効果や問題点を浮き彫りにした。

研究成果の概要(英文)：This research investigated over ten sites in five countries, e.g., "Mather's More Than a Cafe" in Chicago, USA, "Chiiki-shokudo" operated in Kushiro, Japan, "Day Service" operated by Enkyo in Sao Paulo, Brazil, and "Activity Center" in Chang Rong Community and Tainan-YMCA in Taiwan. All sites provide meal and/or cafe services and many programs such as computer classes, singing club, fitness, care prevention classes, holding events and so on. We interviewed over 200 people, including elderly customers and organizers about their Quality Of Life, activities in their communities including their visits to the places. We used questionnaires such as PGC Morale Scale as a part of the interview. Through the interviews, we found their emotional and behavioral changes, i.e., participants are motivated to be more active, before and after participation of the sites. As a result, these places could be the platform for the elderly to find a sense of belonging and reason for living.

研究分野：環境行動学

キーワード：社会福祉関係 コミュニティ 高齢者 縁側サービス 国際比較 QOL 居場所 コミュニティカフェ

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、地域ケアや地域密着型サービスが導入された後も、次のような問題を感じていた。介護が必要な高齢者やその家族の多くは、在宅介護が困難になってはじめて高齢者福祉施設をケアマネージャーから紹介され、不安を抱えながら新しい環境に身を寄せているという現実である。これは、高度経済成長期以降の地域コミュニティが崩壊した日本において、地域内で元気な高齢者と福祉サービスが繋がる方策がとられてこなかったことに起因する。しかし、釧路市でグループホームを運営するNPO法人のように、コミュニティ・レストランを活用して、高齢者自身が調理や接客をし、子育て中の母親の相談相手や子供の話し相手となるなど、地域と「なじみ」の関係が醸成されている例もあった。これ以外の取り組み例としては、ミニコンサート・お祭り・地域交流会・家族介護教室等のイベント開催、介護用品・会議室・テント・ガーデニング用品等の貸し出し業務、託児所運営等が見られた^{文1,2)}。

本研究では、以上のような、あたかも民家の縁側に立ち寄ってお茶を飲みながら会話を交わす、物を借りるといったような機能を「縁側サービス」と称し、高齢者が地域や福祉施設との「なじみ」を生み出す取り組みを研究対象とした。

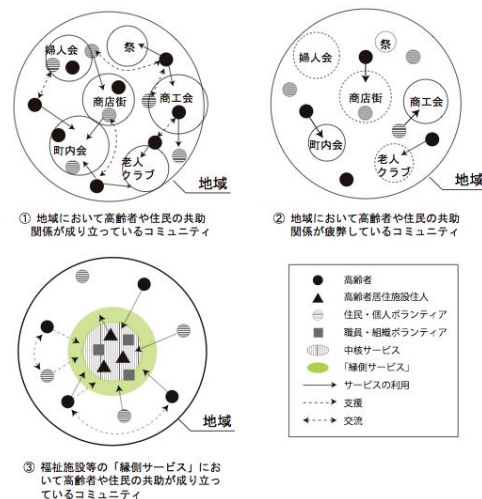
元気な高齢者が地域コミュニティと関係を持ちながら、福祉サービスとも繋がる事例や繋げようとするサービス展開を狙う事例が海外にも存在している。例えば、アメリカのシカゴを拠点とするNPOのMatherは、Mather's More than a Café(以下、Mather's Café)を「縁側サービス」拠点として展開している。ブラジルのサンパウロでは、日系人社会が既に日本では見られなくなった濃密なコミュニティを一部で維持しており、県人会や老人クラブ、援協、文協といった組織が「縁側サービス」を既に展開していたり、展開しようとしている。また、中国・瀋陽では、団地内でマージャンや将棋といった趣味の集まりが日常的に見られ、いまだ濃密なコミュニティを維持している。そのなかで、民間福祉施設の松蒲博愛が研究代表者の考え方に同調し、コミュニティ・レストランと配食サービス機能を持つ新たな福祉施設(地域密着型小規模特養のような施設)を展開する準備を進めていた。一方、台湾・台南にある大規模な高層集合住宅地の長榮社區は主に退役軍人とその家族のために建設された集合住宅であり、住民の30%以上が65歳以上の高齢者である。ここでは公共施設としてコミュニティ活動センターがあり、節句を地域住民と祝ったり、配食や訪問介護などのサービスを提供したりしている。また、コミュニティ内の中庭や公園では、住人のみならず近隣住民が健康を維持するため、毎朝太極拳を行う様子が窺え、「縁側」的な交流場所として利用されてきた。

上記事例のある4カ国は、日本のような公的介護保険制度がない。米国では、良好な福祉サービスは一般に高額で、低額なものも多くはキリスト教などの宗教を背景とするボランティア的な組織が運営していることが多い。また、中国では、公務員や国営企業出身者向けの福祉サービスは比較的良好なものも出てきているが、一般庶民向けのサービスは公的な支援がないままに民間福祉施設が担っており、施設サービスは日本と比較して厳しい状況にある。ブラジルでも、良好な福祉サービスを維持する公的支援がなく、寄付を中心とした厳しい財政でボランティア的な側面が大きい。急速に高齢化が進んでいる台湾においては、高齢者の介護は家族が行うという考えが根強く、公的支援はほとんどないと言っても過言ではない。このような現状から、地域コミュニティの活力に頼る「縁側サービス」の展開が一つの打開策として模索されていると考える。したがって本研究では、こうした「縁側サービス」が見られる事例を国際比較することを考えた。

2. 研究の目的

本研究では、高齢者と地域との間に「なじみ」の関係を醸成させる取り組みとして、これらの事例を国際比較し、それぞれのサービスの背景にある地域コミュニティの現状を把握する。福祉施設や地域交流施設などを拠点として高齢者が主体的に関わる「福祉コミュニティ」像について考察し、将来的に望ましい福祉コミュニティ像を明示することを目的としている。

特定地域において、要介護者とその家族が居宅で通常の生活を続けるためのサービスを受けることに着目した「福祉コミュニティ」^{文3)}ではなく、要介護者を含む高齢者自身がサービス提供者であったり、自ら施設や地域と「なじみ」になったりとするような主体的な存在としては扱われる「福祉コミュニティ」を考える。



図：縁側サービス概念図

本研究では、上図に示す概念を仮定した上で「福祉コミュニティ」の可能性を考察した。「縁側サービス」的なサービスは、高齢者を主体的に地域や福祉施設と関わらせ、その活動自体が高齢者の介護予防となったり、さまざまな地域住民との交流や支援のネットワークを広げることで地域力を育んだりすることが期待される。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者および分担者の計3名が、本研究に協力する中国人大学院生や現地の研究協力者との密な連携の下で進められた。当初の調査対象はシカゴ（米国）にある Mather's Café、ミルウォーキー（同）にある St. Ann Center for Intergenerational Care(以下、St. Ann)、サンパウロ（ブラジル）の日系福祉団体日伯援護協会（以下、援協）や憩いの園・日系人県人会等のコミュニティ・サービス、台南北區長榮社區（台湾）のコミュニティ・サービス、瀋陽（中国）にある松蒲博愛が進める地域食堂を持つユニット型老人ホームであった。しかし、瀋陽の事例は、平成23年度の段階で中国政府の福祉政策の方針転換などの影響を受け、コミュニティサービスの質が低下し、途中で対象外とせざるを得なくなった。かわりに、台湾の現地研究協力者との研究討論の結果、台南市 YMCA が新たな縁側サービスを展開することとなり、調査対象に加えることとなった。また、デンマークでは約20年前の施設解体時から本研究テーマと似たようなコンセプトで居場所整備が行われたという報告^{文4)}はあるが、その詳細を読み取ることはできなかった。そこで、コペンハーゲン郊外の4施設も対象とした。

これらを現地調査し、既に調査を開始している釧路の地域食堂や芦別の特養内にある地域喫茶などの調査結果と比較し、今後の福祉施設における「縁側サービス」のあり方を検討した。

本研究では、以下に示す各地で調査を進めた。

(1)シカゴ（米国）Mather's Café：現地カフェの責任者とボランティアスタッフ、利用者に対するインタビュー調査とプログラムの視察を基に Mather's Café の「縁側サービス」の現状とその背景を明らかにした。

(2)サンパウロ（ブラジル）日系福祉施設や日系文化協会等のコミュニティ・サービス：援協や憩いの園、サンパウロ市が設置している検診施設と高齢者向け自立支援型文化教室の複合施設 CRI-NORTE でのスタッフと利用者へのインタビュー調査などを実施した。ただし、2回目の調査は、CRI-NORTE から直前にキャンセルされたため、援協と憩いの園、サウジ地区文化協会での調査のみ行った。

(3)台南北區（台湾）長榮社區：本地区のコミュニティ・サービスの現状と住民意識について、スタッフとボランティア、利用者インタビュー調査などを行った。

(4)台南西中區（台湾）台南市 YMCA：楽齡学習センターを中心としたコミュニティサービスについて、スタッフとボランティア、利用者インタビュー調査などを行った。

(5)コペンハーゲン郊外ホースホルム地区およびドラウア地区（デンマーク）のアクティビティ・センターおよび高齢者複合施設：ホースホルム地区の地区役場、アクティビティ・センター「ソフィルン」および「セルメルスボ」、高齢者複合施設「ルイスランド」、ドラウア地区のアクティビティ・センター「ヴィダゴー」における、施設長、ボランティアスタッフ、利用者などへのインタビュー調査などを行った。

(6)日本側の比較対象事例として、平成23年度から新たに京都の高齢者総合福祉施設「ももやま」を追加し、施設長、縁側サービスの担当者、地域ボランティアスタッフ、利用者へのインタビュー調査などを行った。

(7)日本側の比較対象事例として、平成24年度から武蔵野市のテンミリオンハウス事業を追加し、市担当者、運営者側、利用者へのインタビュー調査などを行った。また、併せて、東京における類似と思われる取り組みの視察を複数行った。

役所の担当者および施設長やスタッフへは、高齢者との関わりの工夫や運営方法などの仕組みや活動実態について確認した。ボランティアスタッフや利用者には、幸福感指標を用いた質問と縁側サービスの利用動機や関わり方とその変化、精神的な影響などについて、半構造化インタビュー形式で聞き取りを行った。また、特徴的な場面に関しては、行動観察調査も行った。

4. 研究成果

幸福感指標については、日本人の場合、西欧諸国の国民に比べ値が低めに出るという意見もみられる。日本側の比較対象事例は、健常高齢者のデータとしては高い値を示していたものの、本研究の結果からも、同様の傾向が見られることが分かった。ブラジルの日系人は、日本在住の日本人に比べ、楽観的な傾向が見られた。このような被験者の人生観については、各国の文化などの影響が色濃く見られることもあり、文化的・社会的背景なども考慮しながら分析を行った。

一方で、高齢社会のコミュニティに関する基本的な考え方の多くは、文化や社会の現状を問わず、全体的な共通認識が見られること

が分かった。

釧路のわたぼうしの家、芦別慈恵園、京都のももやまは、地域とのつながりを考える上で、高齢者を縁側サービスの人的リソースとして活用する点などが特徴的である。海外比較対象事例である Mather's Café や St. Ann、長栄社區は、高齢者やその家族をコミュニティと繋げ支えるという考え方が、上述した日本の縁側サービスの先進事例と近いもので、プログラムの頻度や種類といった充実度では日本の事例を上回るものであった。

特に、Mather's Café と長栄社區の取り組みは、高齢者を利用者という位置付けだけでなく、サービス提供者として主体的に関わる仕組みを積極的に取り入れている点が、極めて類似している。これは、日米台で、ほぼ同時期に本研究テーマに関わる問題が顕在化し、その対応策として極めて似通った手法をとったことを表している。ブラジルの援協や台湾の台南市 YMCA では、我々の提唱する縁側サービスの考え方を知った担当者達が積極的に事業に取り入れ始め、その内容を拡充させている。

この十数年間に試みられてきた上記のような高齢者と地域を結びつける先駆的な試みに近いものが、高齢者福祉が先行したデンマークでは今から 20 年以上前から実践されている^{文4)}。デンマーク政府の福祉に関する政策転換が発端である。そこで、1988 年の政策転換直後の高齢者住宅のモデルケースとして建設されたデンマークの先進事例ヴィダゴーを、新たに建設された施設を含む 3 施設と併せて調査した。ヴィダゴーでは、健康な高齢者の主体的な活動に関して、20 年以上の積み上げの成果もあり、高齢者自身が企画書を書いて設備の資金調達を行うなど、極めて先進的なものであることが確認できた。一方で、ADL の変化に伴う生活の質の変化を最小限にとどめるために地域と繋がり続けられる仕組みはハード面でしか形成されておらず、我々のコンセプトを体現したものではなかった。計画時には考えられていたはずの理念が、健康な高齢者の自発的・主体的行動に完全にゆだねられたプログラムによって、偏った視点からの運営になってしまっていた。ADL などの低下した要介護高齢者には、心理的な負い目などもあり、健常高齢者と一緒に主体的な活動を起こすことが難しい面がある。デンマークの事例とその他の縁側サービスの事例を比較すると、日米台の事例では福祉の視点を持ったコーディネータが存在することが大きい。このことから、縁側サービスをスムーズに進めるためには、高齢者の主体性を引き出すことができ、福祉とまちづくりの双方の視点を兼ね備えたコーディネータが重要な鍵を握ることが伺える。

サービスのコンセプトは似通っているものの、日本の縁側サービスの先進事例の多くは、母体施設が居住系の高齢者福祉施設である点と徒歩圏にサービス拠点がある点が、そ

の他の事例と異なる。Mather's や長栄社區などの海外比較事例はどれも、身近に居住系の福祉施設を持たない。そのため、ADL の変化などによる環境移行に関して問題を抱えており、利用者へのインタビューでもその不安などが垣間みられた。

これらの結果から、本研究の基本コンセプトである福祉と一体化した縁側サービスにおいて、特別養護老人ホームや在宅介護サービスを受けられる環境を中心に据えることの重要性を確認した。

前述したように、ブラジルの援協や台湾の台南市 YMCA が縁側サービスのコンセプトを実行するにあたって、本研究チームが積極的に関与し、プログラム形成に寄与した。本研究の日本側事例の一つである芦別慈恵園についても、同様のプロセスを経ている。このように、本研究のコンセプトが福祉の現場で取り入れられている点からも、本研究のインパクトが伺える。

様々な事例の調査と実践に関わりながら、少子高齢社会の福祉コミュニティのあり方の一つとして、「縁側サービス」を中心に据えたコミュニティの有効性とその成功のコツを明らかにしてきた。

この 5 年間で、日本国内では、介護保険制度の変更などの高齢者福祉を取り巻く環境の変化も見られ、さらには、震災復興や高齢化による空き家対策など少子高齢社会となった日本の諸問題に対する様々な取り組みが見られるようになってきている。それらの中には、高齢者の居場所として、図らずも本研究の中心に据えた「縁側サービス」に類似したサービスも生まれてきている。枠組みが微妙に異なるものや、似通ったサービスでありながらその出自の異なるもの、着眼点の異なるものなどが混在している。そこで、これまでの研究成果を整理しつつも、本研究を取り巻く周辺の状況も合わせて整理し、「縁側サービス」の位置付けの明確化、他のサービスや取り組みの分類と比較なども合わせて検討する必要があると考える。

<参考文献>

- 1) 隼田尚彦ほか、痴呆性高齢者グループホームの周辺地域住民との関係性 地域ケアへ繋がる試み、高齢者問題研究、No.21、2005
- 2) 加藤仁、介護の「質」に挑む人びと、中央法規出版、2007
- 3) 直井道子ほか、高齢者福祉の世界、有斐閣アルマ、2008
- 4) 松岡洋子、デンマークの高齢者福祉と地域居住 最後まで住みきる住宅力・ケア力・地域力、新評論、2005

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3件)

Naohiko Hayata, Megumi Katayama,

Nana Fukuda, THE POSSIBILITY OF EN-GAWA SERVICES; AN ATTEMPT TO INVOLVE THE ELDERLY WITH THE COMMUNITY, The Journal of Nutrition, Health & Aging, 査読有, Volume 17, Supplement 1, ppS73-S74 (2013)
片山めぐみ, 隼田尚彦, 福田菜々, 「高齢者と地域を結びつける「縁側サービス」の効果 - 福祉系 NPO 法人によるコミュニティ・レストランを事例にして - 」、日本建築学会計画系論文集、査読有、第 77 巻、第 680 号、2012、2399-2406
隼田尚彦, 片山めぐみ, 福田菜々, 陸埜, 少子高齢社会におけるコミュニティを再構築する「縁側サービス」、日本建築学会北海道支部研究報告集、査読無、84 巻、2011、419-424

り、2014、321(251-290)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

隼田尚彦 (Naohiko Hayata)
北海道情報大学・情報メディア学部・教授
研究者番号：40301014

(2) 研究分担者

片山めぐみ (Megumi Katayama)
札幌市立大学・デザイン学部・講師
研究者番号：40433130

(3) 研究分担者

福田菜々 (Nana Fukuda)
北海道科学大学・工学部・講師
研究者番号：70554731

〔学会発表〕(計 5 件)

Naohiko Hayata, Megumi Katayama, Nana Fukuda, Triple-win Platform in Super Aged Societies; A base for community development, International Association for People-Environment Studies, 2014 年 6 月 26 日, ティミショアラ (ルーマニア)

福田菜々, 片山めぐみ, 隼田尚彦, 陸埜, 高齢者と地域を結びつける「縁側サービス」 その 1 パターン分析、日本福祉のまちづくり学会、2011 年 8 月 28 日、国際障害者交流センター「ビッグ・アイ」(大阪府・堺市)

片山めぐみ, 福田菜々, 隼田尚彦, 陸埜, 高齢者と地域を結びつける「縁側サービス」 その 2 釧路市「わたぼうしの家」の試み、日本福祉のまちづくり学会、2011 年 8 月 28 日、国際障害者交流センター「ビッグ・アイ」(大阪府・堺市)

陸埜, 隼田尚彦, 福田菜々, 片山めぐみ, 高齢者と地域を結びつける「縁側サービス」 その 3 台湾と中国における「社区」が果たす役割、日本福祉のまちづくり学会、2011 年 8 月 28 日、国際障害者交流センター「ビッグ・アイ」(大阪府・堺市)

Naohiko Hayata, Megumi Katayama, Nana Fukuda, Lu Kun, The possibility of the informal services; an attempt to involve the elderly with the community, Environmental Design Research Association 42, 2011 年 5 月 28 日, Chicago (USA)

〔図書〕(計 1 件)

隼田尚彦, 片山めぐみ (坂倉恵美子 編著：分担執筆)、ワールドプランニング、積雪寒冷地における高齢者の居場所づく